

2019年度 第1回 観察会 記録

日 時	2019. 4. 21 (日) ～ 22日 (月) 快晴
観 察 地	佐賀県藤津郡太良町大浦 シニア自然大学校自然学講座アサリ再生実験区 長崎県島原市栄町 諫早干拓地
講 師	田中 克 先生 (京都大学名誉教授・当講座コーディネイター) 平方 宣清 さん (アサリ再生実験区提供者・漁業者)
テ ー マ	2019年アサリ収穫祭参加・諫早干拓地視察
備 考	参加者 17 名 (田中先生は 22 日のみ参加) 記録 叶 昭子

1. 4月21日 アサリ収穫祭

4月21日 佐賀県 JR 肥前鹿島駅に 11 時集合し路線バスで肥前大浦駅へ。ホテル送迎バスで宿泊先ホテル蟹御殿に 12 時 30 分到着。着替えて 14 時 30 分頃に太良町の干潟にて平方宣清さんと再会。アサリ収穫祭開会式終了後、潮干狩りを楽しんだ。

(1) 平方宣清さん挨拶 (写真右)

私は田中克先生の指導のもと、有明海再生事業のひとつとしてアサリ漁場を実験の場に提供しています。有明海の豊かな海を存分に味わってくださいと言いたいところですが、ここ数年アサリも何も育たない海になっています。しかし田中先生のお陰で、他所の漁場にはない環境でアサリが増える傾向がみられるようになってきました。今年よりも来年、再来年と、より多くのアサリが獲れる様に頑張ります。皆さんとともに再生していく有明海の状況を確認していきたいと思っています。



(2) 吉永郁生先生挨拶 (写真左)

私は、田中先生とこちら (太良干潟) に来たのが 2011 年で、それから 7～8 年になります。当時は京都大学に在籍して、2 年後に鳥取環境大学に移りました。以来京都大学と鳥取環境大学と合同調査してきました。海の再生には時間がかかります。3 年間の再生事業でどう変化するのか観察を続け、目に見える結果には至りませんでした。私達は焦らずに調査をつづけました。それから 7～8 年経過し徐々に再生しつつあることを実感しています。アサリは大きくなるには数年かかります。今日は、環境大学から 8 名来ました。できる限り調査対象区域を大きく設定し、稚貝や成貝の分布を調査します。皆さんには有明の干潟の感触を味わい、干潟の生物を観察していただければと思います。

(3) 潮干狩り

シニア自然大学校の我々はこの調査に加わることなく、環境大の標本採取が終わるのを待ち、潮干狩りを楽しんだ。昨年秋の台風 21 号により防護ネットがめくれ上がり、その間にナルトビエイ等にかなり捕食されたとのことであったがそれでも約 1 時間ほどで約 2 kg ほどの収穫があった。(右写真)

アサリはホテルの調理場に提供したところ、翌朝味噌汁になり、美味しくいただきました。



(4) 干潟の観察

1) キレートマリン

アサリ再生実験区は、沖の方向へ土嚢の上を約 100m ほど歩いたところへ、100 m² × 2 区画の広さに食害防護ネットを張っている。昨年の台風 21 号の影響でネットがめくれ上がり、新しいネットに更新し、1 区画にキレートマリン(右写真・注)が散布されていた。



注：キレートマリンは、鉄分(フルボ酸鉄)とケイ素を溶出し、植物プランクトン(珪藻類)を増殖させて、富栄養化を抑制し、ヘドロを分解して水質を浄化する効果が実証されている。キレートマリン購入費をシニア自然大学校も負担している。

2) 干潟で見かけたアサリ貝を食べる天敵

- ① ツメタガイ：しばしば穴の開いた貝殻を見かけるが、この穴はツメタガイが開けた穴。
ツメタガイは肉食性の巻貝で他の貝を襲い、口にあるノコギリの歯舌や酸を使って殻を削り穴をあけて中の肉を食べるという。
- ② ホトトギスガイ：足糸でからまって群れ、海底をほう様に動く。富栄養な環境を好み転石にも着生する。ホトトギスガイは、こちら一面に覆ってしまいアサリは栄養分をとられてしまい、死ぬという。

- 3) タイラギ貝(の殻)：かつては大量に獲れていたタイラギも今では貝殻に牡蠣が着くありさま。
タイラギ貝はハボウキガイ科の二枚貝。大型で殻長 30 cm に達し、貝殻は薄くほぼ三角形。外面は黒味がかかった緑褐色。浅海泥底に突き刺さった形で住み、貝柱は大きくて美味という。平方さんはかつてこの貝で生計をたてるほど多くの漁獲があったとのこと。



① ツメタガイ



②ホトトギス貝



タイラギ貝



潮干狩りを楽しむ人々

4) アサリの浄化力を観察：干潟の海水 120ml にアサリ 3 個を入れ、海水透明度の変化を観察した。
30 分で澄明になり、その浄化力を改めて認識した。



スタート



30 分後



1 時間後

(5) ホテルで平方宣清さんと懇親会

潮干狩りが終り、一風呂あび、夕食に平方さんをお招きし懇親会をしました。

【席上での平方さんのお話し】

昨年 7 月、福岡高裁から諫早潮受け堤防開門無効という判決が出るとは、私たちは夢にも思いませんでした。高裁が確定した判決を無効と判定したこと、その理由に漁業者側が持っていた漁業権が 2013 年に切れたことが、開門を命じた 2010 年の福岡高裁確定判決後の「事情変更」にあたると認定し、国が確定判決にしたがわれないことを許容しました。しかし我々は 2013 年に漁業権を再取得しているのです。誠に理屈の通らない、啞然とする判決でした。



国は勝訴が確定すれば、漁業者側に支払ってきた約 12 億円の制裁金に 7 % の利息を上乗せして返還を求める意向のようです。

福岡高裁は有明海再生のための基金 100 億円を設けて和解を提案してきたが、私達漁業者は和解に応じませんでした。有明海の再生はこんなまやかして解決できることではないからです。

国の権力に屈せず、弁護団との世論を盛り上げて有明海再生には開門しかないことを、今後も全国へ訴えていきたい。裁判所には全国の国民が判決を注視していることを訴えていきます。

かつて有明海はゆたかな海であったがここ 7 年連続でタイラギの不良が続いる。今日、アサリを掘ってもらったがほとんど獲れず、収入につながらない。車海老漁も同様で、潮受堤防が締め切られ潮の流れが遅くなり、有明海を攪拌する力が弱くなってきているためと思う。澄んだ海は見た目には綺麗だが海の力は弱い。海が濁っていたら、植物プランクトンは光合成ができないので増えないが、澄んだ海は光が届き光合成が進み、赤潮が広がる。植物プランクトンの死骸をバクテリアが消化する時に酸素を消費するので海底が貧酸素状態になっていく。悪い事にガタから硫化水素が発生する状況になり、底生生物が育たない環境になっている。さらにナルトビエイ、カモなどによる食害や嵐にも見舞われた。諫早干拓地で営農する松尾さんもカモの食害にあっている。

今まで、農業者対漁業者の対立だったのが、農業者も同じ被害を受けており、開門しないと作物もできないという。漁業者、農業者が協同して活動する方向が見えてきた。

豊かな有明海を取り戻し、有明海沿岸の地域経済を活性化し、後継者に繋げることが出来る有明海にしたい。地方創生と言っているが地方の産業を壊した国の責任は罪深い。私たちも弱い立場ではあるが、全国に向けて運動を展開するので今後ともよろしく願いいたします。

以上の平方さんのお話しを聞き、参加者全員一言ずつ感想や励ましのスピーチをしました。

2. 4月22日 諫早湾潮受け堤防から有明海と調整池を視察

8時20分蟹御殿を出発、JR長崎線小長井駅前で田中先生と合流。諫早湾潮受け堤防へ向かう。

(1) 諫早湾潮受け堤防・展望所における平方さんの説明(要旨)

『1952年、長崎県知事西岡竹次郎は当初諫早湾全体を埋め立て農地にして食料難を解決するため、「長崎大干拓構想」として発案したのをきっかけに、米余りの時代を迎え計画は3分の1に縮小。昭和35年に起きた大水害により、防災目的が追加されたことで、それまで干拓事業に反対していた漁業者は了承せざるを得なくなった。農水省は1989年「国営諫早湾干拓事業」を事業費2533億円で着工、1997年4月14日、潮受け堤防の水門が閉じられた。潮受け堤防展望所に、長崎県が設置した諫早湾干拓農地に関する説明版があり、これによると「平成20年4月から諫早湾干拓地での農業が開始され、現在、39の農業経営体が1区画6ヘクタールないし3ヘクタールの平坦で大規模な約670ヘクタールの農地において、環境に優しい農業を展開しています。ミネラル分豊かな干拓農地では、ばれいしょ、たまねぎ、レタス、はくさい、ミニトマトなどが栽培、収穫されており、また、干拓地の入植農業者全員がエコファーマー(土づくりや減化学肥料・減農薬などの環境に優しい農業に取り組む農業者)として環境保全型農業に取り組んでいます。平成24年度の収穫済面積は、1,200ヘクタールを超えています。品目も多岐に渡り、50品目以上の作物が栽培されており、出荷された農産物は、市場関係者から高い評価を受けています。



また、農地が大規模であるからこそ、農業機械やハウス施設等も大規模になり、農家は、これまでに施設や機械の導入等に多額の投資を行い、先駆的な農業経営に懸命に取り組んでいます。」とのこと。

全国の皆さんに知っていただきたい。干拓農地は本当に国がいうように優良農地か？実際には土質が悪く、調整池の影響で夏は猛烈に暑く、冬は寒く、野鳥による作物の食害がひどく、採算がとれないとして数軒が離農したという。調整池は野鳥の楽園と説明しているが、夏は有毒なアオコが発生し、それを有明海に垂れ流している。このように長崎県にとり都合のよい、事実ではないことが説明してある。

潮受け堤防を開門する事によって干拓農地のこのような問題が解消するのではと考え、農業者のなかに開門を主張する人が現れた。干拓地に入植した松尾さんたちであるが、彼らと連携した活動を進め、先祖代々続いた豊かな有明海に戻す私たちの夢を実現へ向け取り組みたいと思っている。』

調整池と有明海の水の色を見比べると明らかな違いが見られた。ふたたびバスに乗車し諫早湾、調整池を望む白木峰高原に向かう。

(2) 白木峰高原

諫早湾干拓地が全貌できる丘。本日はかすんで、見渡せなかったが、本名川がかすかに見えた。諫早湾干拓について、諫早湾干拓事業説明盤で平方さんの説明あり。この時の平方さんの述懐。

『韓国のスンチョン湾の干潟が話題になっているが、諫早干拓はスンチョン湾の干拓より大きかった。豊かな海で、アゲマキ、ハイガイ、タイラギ・ワラスボ、ムツゴロウ、ウナギなど、海に行って、夕方食べるおかずなど採って豊かな食生活であった。漁業の対象としての海だけでなく、日常生活に繋がった海だったので、これが破壊されたことは我々にとり大きなダメージであった』

(3) 諫早湾中央干拓農地で 横林和徳さんのお話し

1) 田中先生が横林和徳さん紹介

諫早湾干拓地をめぐる問題は裁判だけに頼らない新しい動きがある。元諫早農業高校教師横林さんは開門・非開門、意見の違いを超えて諫早湾干拓問題の話し合いの場を求める為に活動をされており、新たな角度から問題解決の努力をされています。

2) 横林和徳さんのお話し

『諫早湾干拓問題の話し合いの場を求める会の活動をしています。諫早湾潮受け堤防の開門賛否についての話し合いの場がない。円卓討論の場を準備したこともあるが参加者がなかった。しょうがなく、一軒一軒家庭訪問し、聞き取り調査とアンケートをお願いしている。

地域を廻り聞き取り調査する過程で分かってきたことがある。山手に住む人たちは、昔から多くの水田を諫早湾を臨む地域に持っている。彼等は多くの人を集め開門反対の集会を盛んに行っているが、開門反対理由は何か？

「水害で昔のように家が浸かる。水田が浸かる、海水被害で農作物に被害が及ぶ。二度とそういう被害を受けたくない」とのことであった。しかし、潮受け堤防の開門、閉門について

の知識は貧弱であった。現在、本明川から流れ込む調整池の水位をマイナス 20 c m に保つ為、干潮時に 2 つの排水門を開いて有明海に調整池の水を放水している。逆に有明海の海水を堤防の外から調整池に入れることはない。このことも分からず反対というひが多いのが現実で、説明会にも来ず、内容はわからずに反対している人が多いことが分かった。

開門反対派の中に、漁民は開門要求するなら漁業補償金を返してから云えという人がいる。漁業補償金も堤防の内と外では全く違うにも関わらず、十把ひとからげの感情的支配が地域全体に漂っている。

裁判は長く続き、どっちに転んでもわだかまりが残る。このこと避けるためにも諫早湾干拓問題の話し合いの場を求める会を立ち上げ、諫早湾問題を地域で共有できる体制を作るべく頑張っている。

開門反対派の人の中にも、「農業者、漁業者、防災の全てに問題がないのであれば開門してもよい。以前は有明海が日常の食生活を支えていた。お年寄りほうなぎばかり食べていた頃が懐かしい。用水路にはうなぎが沢山いて食べきれないほどだった。」という人もいる。

いつまでも対立が続くのはよくないことであり、よい方法を見出し、お年寄りの心の中に今もある豊かな有明海を取り戻したいと思う。その日がくることを夢見て活動を続けています。ぜひご支援ください。』



(4) マツオフーム松尾公春さんのお話し

中央干拓地のマツオフームを訪問し、営農の現状を聞きました。

『干拓地に入植して 11 年目になります。元々水産業をしていたが、10 年ほど前から魚が獲れなくなりました。水産業の会社ではダイコンの栽培もしていた関係から、県農業公社から干拓農地での営農の勧めがあり、最初その気はなかったが結局 1 区画 (100m×600m) の農地を 4 区画契約し、入植することになりダイコンなどいろいろな作物を作りました。』

当初から赤字にならないように経営をしたこともあり、県も優良農家であると評価し、5年毎のリース契約を更改して2期目に入りました。広大な農地では農業機械が必要で、100馬力、1300万円のトラクターを導入するなど設備投資もしました。年度末には決算書を出さなければなりません。何処で何を作ったか、誰に売ったか、いくらで売ったか、次年度は何を作るのか、再来年はどうか、借金はいくらあり、返済予定はいつかなど、県は調査にきます。私よりよく情報をつかんでいます。必要と思わない書類まで提出を要求してくる。2期目も印鑑だけで済むようにしますからと云いながら、20枚の書類提出を要求してきた。



諫早湾干拓農地は借地方式で、国から干拓地の一括配分を受けた長崎県農業振興公社が各営農者に5年契約でリースする方式です。借地料は1年間で1ha20万円、かん水設備などの賦課金が同じく7万円。公社はそれを営農者から受け取りながら、70年で造成費用を国に返すシステムです。リースなのでいくら支払っても自分の土地にはならない。え農家や法人は建物や機械に多大な投資が必要です。

農業公社は3期目の契約にあたり、全ての入植者に対し5年後の再契約時までに借地料の滞納があった場合には、再契約しないなどの同意書にサインを求めてきた。マツオフームは過去10年間滞納していないが、3期目の更新契約書類に不備があることを理由に再契約はしない、農地を更地に戻し退去しようと通告してきました。真の理由は私が潮受け堤防の開門を要求していることにあります。優良農地というから入植したのに、農業に適した地質ではなく、冬場には気温がマイナス7度にもなり、ハウス栽培で暖房を入れて作物を作らなければならない。逆に夏場の温度は酷暑となる。また調整池に飛来したカモが、池にエサがないので農地にきて野菜を食い荒らす。この原因は締め切った調整池にあると考え、開門して調整池を有明海の水を入れることが必要と思い、その考えを述べたところ、生産物の販売網を断ち切られるなど強烈なバッシングにあっているが、負けるわけにはいけないので、マツオフームでは野菜などの直売所を設けて全国に出荷する計画を進めています。赤ジソジュースも作ってるので試飲し、よければ買って下さい。

開門については、以前は問題の本質が解っていないく、入植者は開門反対が絶対条件だった。開門裁判があった頃、県はヘリコプターによる街宣活動などで、「開門すれば農業が出来なくなる」と煽り、我々の立場は「開門により農地が水没してしまうの困るから開門反対」であった。

反対集会での座り込みは、法人の場合3人以上参加せよとのことであったが、忙しくていけないので、代わりにトラクターを持って行こうとしたら、そんな過激なことはしないでと言われた。今思えば笑い話です。

調整池の水は汚く、農業用水水道蛇口をあけるとゴミが出てくる、魚やシジミの殻もでてくる。病原菌が一番困るので、ハウスでは濾過した水を使用しているが、費用は自弁です。

〈田中先生コメント〉

今日皆さんをここにお連れしたのは、日本の農業・林業・水産業は確かな土台を作り直さないといけないが、松尾さんのように問題を抱えながらも大地に生きて農作物を作り続けるひとを、我々都市に住む人がしっかりとサポートしていく必要があると思い、松尾さんを紹介しました。松尾さんは、困難な環境のなかであっても、ここで頑張る意思を明確に持った貴重な人材だと思います。

〈松尾さんの決心〉

契約3期目にはいり、県農業公社プレッシャーをかけてくるが、私を脅せば県に従うと思っていたら、大間違い。私は屈することなくここで営農を続ける決心です。

松尾さんの健闘と事業の発展を祈ってマツオフアームを辞し、JR 諫早駅で解散した。

〈記録者所感〉

今回の観察会はその土地に生きる人のお話から学ぶことが多かった。有明海はいろんなことを教えてくれる。来年も参加したいと思っています。

以上



干潟に出る前に、蟹御殿・「有明海の湯」の前でハイ・チーズ！



白木峰高原にて



マツオファームにて

諫早湾干拓
裁判だけに頼らない新しい動き

干拓農地のためにも このままにはできない

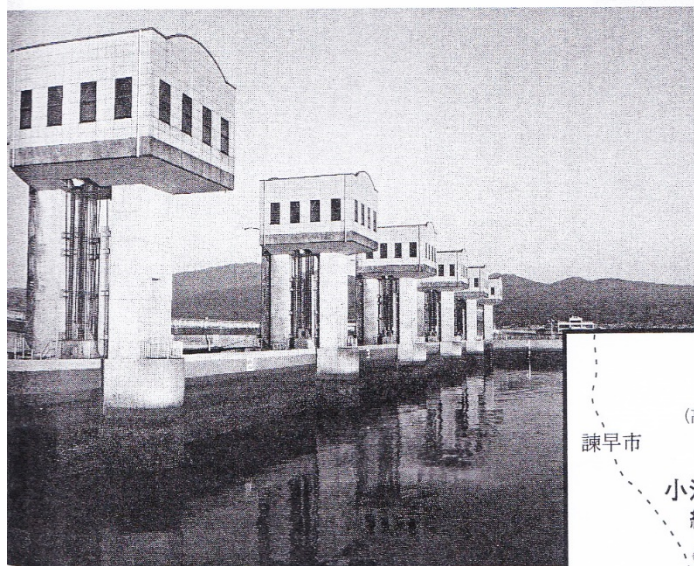
文・写真＝編集部

諫早湾干拓地をめぐる「開門」か「開門反対」か――。

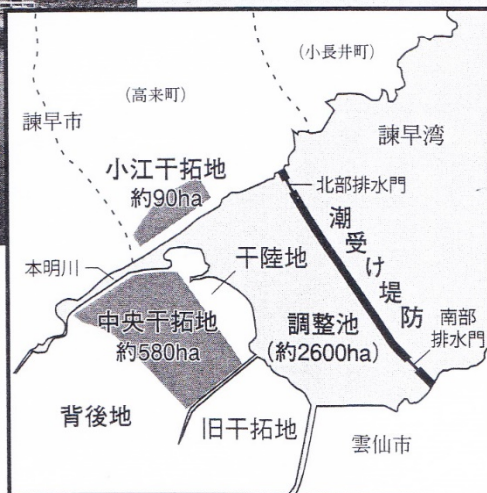
おおかたの人は開門しないことで決着したと思っているかもしれない。
だが現地には、このままの状態を続けるわけにはいかないと考える人たちがいる。

タブー視したままでいいのか

裁判は混迷を深めている。本誌35号で馬奈木昭雄弁護士（福岡・久留米第一法律事務所）が書いていたように、昨年7月30日、福岡高等裁判所において驚くべき判決が出た。同じ福岡高裁が2010年に下した開門を命じる「確定判決」を反故にする、開門を求める強制執行を許さないという正反対の判断がなされたのだ。開門調査を求めてきた漁業者側は最高裁に上告中だ。

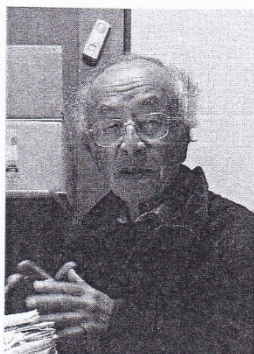


海側から見た北部排水門





もの申す



横林和徳さん

2008年4月、諫早湾奥部に生まれた広大な干拓農地(666ha)で営農が始まった。一般に諫早湾干拓地の問題とは、干拓事業でできた潮受け堤防の開門に反対する農家と、開門して漁業被害を軽減することを求める漁家との対立と思われてきた。1997年に潮受け堤防の排水門が閉め切られた後は、02年にわずか28日間の短期開門調査を行なったのみ。営農開始の6年前から現在まで「閉門」状態が続いている。

では、このまま開門しない状態が続けば農家は幸せなのかといえば、そうとはいえない。08年の営農開始当初に干拓地に入植した41の農家・法人のうち、11の経営体が経営不振などを理由にこの10年間に撤退した。11年目を迎えた昨年は、提出書類不備などを理由に2経営体が契約打ち切りを通告される事態になっている。

「どう判断したらいいかわからんときもあったけど、農業者の一人として、私はもうだいたい前から開門したほうがいいという考えになりました」

そう言うのは諫早市の横林和徳さん(73歳)。横林さんは干拓農地に入植しているわけではない。諫早とは島原湾などの海を挟んだ反対側、同じく干拓地が広がる熊本県八代市の農家の生まれ。諫早農業高校など長崎県で教員を務め、果樹を専門にしていたことから、定年退職後は諫早市北端の小長井でブルーベリーの観光農園を経営してきた。もつとも横林さんは、開門を主張す

るだけでは解決しないこともわかってる。国(現政権)や長崎県は、非開門をこのまま続けたら立派。市議会も多数派は開門しないことで決まりだと考えている。農家や漁家、一般市民のあいだでは、地域や職場で干拓事業について話すことはタブー視され、住民間に亀裂ができていく。横林さんは、お互いが意見・考えを述べ合う場がないために、開門反対の人たちには誤解が多いと話す。厄介な問題にフタをしているだけでは、いつになっても解決しないと思うのだ。

そこで3年前に「諫早湾干拓問題の話し合いの場を求める会」を立ち上げた。横林さんは事務局を務める。いま住民一軒一軒をまわり、アンケートをとりながら、話し合いの場を設けることへの賛同署名を集めている最中だ。

干拓地とともに生まれた九州一の淡水湖

話を進める前に、諫早湾干拓事業の概要をふり返っておこう。

工事中は1989年。18年後の07年に、中央干拓地と小江干拓地、合わせて666haの干拓農地が完成した。農地とともに生まれたのが、全長7kmの潮受け堤防で仕切られた巨大な調整池である。面積2600haの九州一の淡水湖が出現した。潮受け堤防の両端に近いところには北部排水門、南部排水門という二つの排水門が設けられている。

「開門」が争点になってきたが、潮受け堤防はまったく開いていないわけではない。調整池には諫早市内を流れる本明川から常時水が流れ込む。それでも調整池の水位を海抜

マイナス1mに保つため、干潮時に二つの排水門を開いて海側に水を放出している。開門していないというのは、堤防の外から調整池に海水を入れないという意味だ。

諫早湾干拓事業は、優良農地の造成を目的に始まったが「防災機能の強化」もうたっている。07年完成の干拓地には「背後地」と呼ばれる旧干拓地などが隣接し、その一帯は諫早湾の最大満潮時の水位（海拔2・5m）より低いため、高潮・洪水時の湛水害や排水不良に悩まされてきた。それを、調整池の水位をマイナス1mに保つことでを防ぐというのである。

防災機能の誤解

人命重視を主張する防災機能は、当初は事業に反対していた諫早湾・有明海沿岸の漁家が同意する説得材料になったようだ。現在、開門に反対する人も、新しくできた干拓地の入植者以上に背後地で暮らす住民に多い。

「住民が反対する第一の理由は、開門すると57年に630人が犠牲になった『諫早大水害』のような水害が起ることです。しかし、この水害は豪雨による本明川上流の山崩れが原因で、干拓事業の潮受け堤防では防げないことを長崎県議会や国が明言しています」

だが横林さんによると、開門で昔のような水害がまた起こるという誤解が広まったままだという。それに、10年の福岡高裁で確定したのは正確には5年間の「開門調査」で、潮受け堤防の排水門を開けっぱなしにするわけではない。調整池には満潮時に海水を入れながらも、現状のマイナス

1mを保つというものだ。だから潮受け堤防で高潮を防ぐ効果は維持される。開門調査と住宅や農地の湛水害、排水不良も直接関係がないことが理解されていないというのだ。

苦勞してつくつてきた畑だからこそ…

開門した場合の農業被害を心配する人がいる一方で、農業を守るためにも開門したほうがいいと考えるようになった入植者もいる。現在、県から契約打ち切りを通告されている一人で、横林さんとは1年ほど前に知り合った松尾公春さん（62歳）だ。もとは水産の卸販売・加工が本業だったが、20年ほど前から島原で農業も始めた。10年前には県に誘われて干拓地に入植。現在、干拓地に30haの畑を借りて、ダイコンを中心にレタス・ニンジン・ネギ・ホウレンソウ・キャベツ・タマネギなどをつくる。

「優良農地」と聞いて借りることにした畑だが、松尾さんは干潟の泥を乾かしただけの「潟土^{がたど}」に苦勞してきた。

「タイミングが大事なんです。雨がちよつと降って水分が少しあるときでないと硬くてとても耕せない。かといって雨が続いて水分が高いときに耕すと、大きなゴロ土をつくってしまう。それが乾

いたら石ですよ。夏、日照り続きのときは、かん水した翌日耕すとちよつどいいことがわかった。

ここまで来るには『授業料』がかかっています」

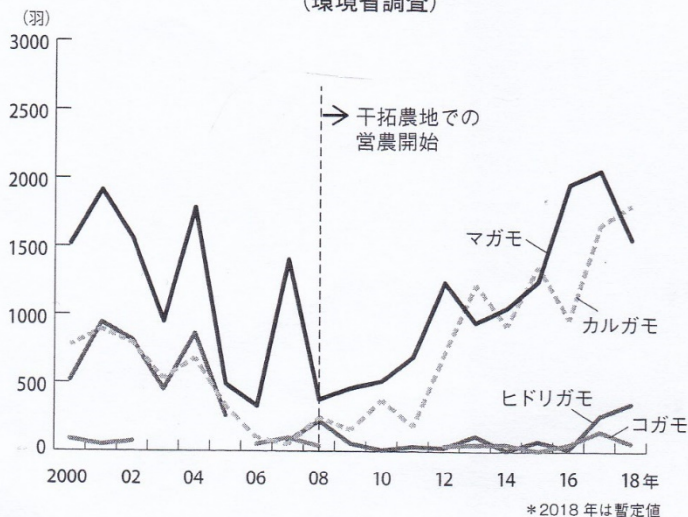


松尾公春さん



中央干拓地の周辺で
見かけたカモ

諫早湾の陸ガモ類の観察個体数の推移
(環境省調査)



苦勞してつくってきた畑だからなおさなのだろう。松尾さんは県の態度に我慢ができず、昨年交わすはずだった3期目の借地契約を保留したまま営農を続けている。

諫早湾干拓事業は従来の干拓にない借地方式で、国から干拓地の一括配分を受けた長崎県農業振興公社が、各営農者に農地を5年契約でリースする方式になっている。借地料は年間1ha20万円、それにかん水設備などの賦課金が同じく7万円。公社はそれを営農者から受け取りながら、造成費用を70年にわたって国に返すというシステムだ。

農地はリースとはいえ、入植農家や法人は建物や機械に多大な投資をしてきた。松尾さんはこれまでちゃんと借地料も払っている。ところが県公社は3期目の契約にあたりすべての入植者に対し、5年後の再契約時までに借地料の滞納があった場合は再契約しないことなどの同意書にサインを求めてきた。

「だっておかしいでしょ。借地料を払えないときは娘を差し出すみたいなことを書けつというわけですから。悪徳不動産屋だってそんなこといいませんよ。借地農家を簡単に追い出せないから『自分から出ていきます』って書けつということでしょう。」

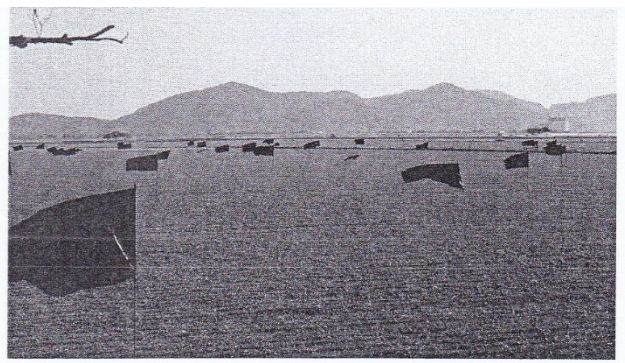
ここは国が公共事業でつくった優良な農地だ。それを県が管理して農家を守っていく。そういわれてわれわれは入植したんですよ。もし農家が経営が苦しくてすぐに借地料を払えないといったら、県は国に『農家が困っているから支払いをちょっと待ってくれ』という立場でしょ」

入植農家が開門を求める理由

松尾さんは昨年、長崎県と県公社に対して裁判を起こし、入植農家として開門を求めることにした。それは次のような理由だ。

▼カモの食害

12〜3月に調整池に飛来するカモに、松尾さんの畑ではダイコンやブロッコリー、レタスが食害を受けてきた。5〜6年前から被害がひどくなっている。生長して大きな



カモ対策に、黒マルチの「吹き流し」をたくさん立てたムギ畑。カモは日没頃から畑に飛来するので、諫早市では今年度から夜間パトロールや犬による追い払いを時々行なっている

れば食べられないが、10月に入って播いたようなやわらかい野菜が狙われる。播種を早めに切り上げなければならなくなった。

カモには海ガモと陸ガモがいて、農産物を食害するのは陸ガモといわれている。代表的な陸ガモは、マガモ・カルガモ・コガモ・ヒドリガモの4種。とくにヒドリガモは植物食の傾向が強い。環境省の調査を見ると、調整池では近年この4種のカモが増えている。干拓地では、ナバナやキャベツ、チンゲンサイ、コマツナ、ムギも被害を受けている。

原因としては、広大な調整池がカモの休息場になっていることがある。カモにとってみれば、隣接した畑は恰好のエサ場だ。開門調査が行なわれて海水が入れば淡水を好む陸ガモの飛来が減る可能性がある。

松尾さんは、県にカモの食害の損害賠償と開門を求めて提訴した。

▼低温

干拓地ではレタスをつくるためのパイプハウスが次々増えている。トンネルやベタがけでは1月以降は寒さで凍って腐ってしまうからだ。松尾さんはハウスを持たないので年内どりの作型しかつけない。だが、30kmほど離れた島原の畑では、冬にレタスをつくるにはトンネルで十分だ。

干拓地の周辺で暮らす人は、干拓地ができて冬は寒く夏は暑くなったといっている。事実、干拓地造成前後の諫早市高来町たかきの冬の気温を比べたところ、夜間・早朝の気温が

干拓前より2〜3℃低下したことがわかっていて。広い陸地が出現したことによる放射冷却の影響だ（真木太一ほか「諫早湾の潮受け堤防と広域干拓による局地気象変化について」）。

また、長崎県総合農林試験場の研究報告にある施設キク栽培の論文には、中央干拓地の最低気温は年間を通して長崎市や佐世保市、島原市に比べて低く、9月下旬〜4月上旬の半年はその差が3〜4℃もあると書かれている。10月下旬〜2月下旬は標高677・5mの雲仙岳の最低気温に近い。

農水省が調整池と潮受け堤防の外側の水温を測った記録もある。それによると1月は調整池の水温が5・7℃なのに対して、海側の小長井沖こながいでは8・5℃とか8・9℃ある（諫早湾干拓事業の潮受け堤防の排水門の開門に伴う環境変化を把握するための調査）。開門調査をして水温の高い海水が調整池に入れば、放射冷却による気温低下が緩和しないか。

なお、中央干拓地は風が強いのも特徴で、最大風速10〜20m/秒の日が1年の半分以上という県のデータがある。そのためキュウリなど果菜類の露地栽培は難しい。

農地を活かすという思いは同じ

取材では、開門に反対する入植者にも話を聞いた。潟土をいかに耕すか、松尾さんと同じような内容をさらに詳しく説明してくれたのが印象的だった。その農家にとっては、苦勞と工夫を重ねてここまできた畑を悪くする心配要因は



いつさい排除したい。松尾さんのほうは、「優良」とはいえない今の畑が開門でもう少しよくならないかと期待する。どちらも願うことは一緒なのだ。

松尾さんが露地野菜の大規模経営なのに対して、その反対農家は大型施設でのキクとキュウリが経営の中心。施設でも冬の暖房代はかさむはずだが、経営形態によって今の状況の受け止め方に差があるのかもしれない。

一方、横林さんは、現在の借地条件（中央干拓は6 ha以上、小江は3 ha以上）を緩和して、もっと小面積から借りられるようにしてはどうかという。干拓地は地盤沈下による排水悪化も課題になっている。カモに低温、排水不良……、そういう農地に年に100万円を超える借地料を払うのはリスクが大きい。

「今年から『家族農業の10年』でしょう。国民の税金を投入してつくったんだから、小さい家族経営にも有効利用してもらおうという選択肢を加えてほしい。私は、干拓農地がいつまでも排水不良で重粘土のままとは思いません。今までの経験・知恵で農家はいろんな工夫をしますよ」

解決の糸口は事実の共有

ただ、干拓農地をよりよく活かすうえで横林さんにはもう一つ懸念がある。調整池の富栄養化だ。干拓地に施した肥料の3分の1は調整池に流れ込むといわれる。濁土を改良するには緑肥もつくられていて、堆肥もたくさん入っている。チッソやリンが流れるのは堆肥でも同じだ。

調整池に流れた肥料成分はアオコや微生物を殖やす。そ

の水が海に放出され海水や海底を酸欠にする。干拓地では肥料・農薬を減らした環境保全型農業をうたうが、海に悪影響をもたらす調整池を抱えた農業がそれを名乗れるか。

全国に干拓地はたくさんあるが、諫早のような淡水の湖とセツトの干拓地はほかにはないという。冬の低温やカモの被害の原因になり、富栄養化した水も溜め込むとしたら、調整池の存在自体に無理があるのではないかとというのが横林さんの考えだ。調整池に海水が入れば、干拓地の外側の干陸地にふたたび干潟ができるだろう。そうなれば農地から肥料成分が流れても、干潟の様々な生き物の力で浄化力が発揮されるのではないかといいのだ（注）。

「諫早湾干拓問題の話し合いの場を求める会」のチラシには、「解決の糸口は事実や情報を共有すること」とある。

横林さんたちは、防災機能の実態、干拓農地のカモ被害や低温の影響、調整池の問題、いずれも事実を共有するところから始めたい。裁判も必要だが、裁判だけでは勝った負けたで後にしこりが残る。いま必要なのはお互いに膝をつき合わせて話し合うことだと思うのだ。

昨年、開門反対の人たちが多い地域にも戸別訪問を繰り返している。そこでも会の趣旨に賛同してくれる人は多く、署名は全部で4000人を超えるところまできた。

地

注 調整池に海水が入るとかんがい用水の水源に使えなくなるが、実現可能な代替案がいくつか提案されている。また、干拓地に塩害が出るおそれがあるともいわれるが、干拓地と調整池の間には「潮遊池」という淡水の水路があり、それによって海水の遡上を防ぐことが可能という。佐賀県など、有明海周辺の干拓地でも塩害は問題になっていない。